

右所々四民無措手足也、開闢以來、前代未會有之大災、死亡不遑錄、田畠屋梁寺社禿倉爲烏有焉、

右以所聞之口實誌於大槻

此記何人の筆録たる事をあらす、恐らくは其頃の人筆記せしなるべし。

〔視聽草四集九〕享和二壬戌年七月高水

上方筋出水、六月廿八日朝より大雨降り續き、廿九日、七月朔日追々出水致し、伊勢路鈴鹿山邊、水海の如くになり、近江路草津河上にて切れ込、宵之内餘程流れ、京都東川筋定杭より、水五六尺相増シ、淀川、桂川、木津川、高水、伏見高橋邊、家之棟江水越、寶來橋、豊後橋、大橋落、宇治橋大損シ、高櫻邊淀川江切れ込、城内江水入、八幡堤切込、河内國中一面水入申候、

大坂野田片町大水野田橋御成橋天満橋落、追々水増しも有之、村々人馬夥鋪水死之由、京屋彌兵衛より之届に候、寫之置也、

先月二十八日九日大風雨にて、伊勢路鈴鹿山崩レ、木土石流出シ、庄野龜山邊海に成、近江路萬津川上に而切れ込、宿内余程流申由、京都東川筋常より六尺計増シ、淀川、桂川、木津川洪水、伏見京橋邊家々坏^荒水越申候由、宇治橋落高櫻邊淀川切込、并塙拾切、河内一國一面ニ水入、大坂野田御成橋落、夫より天満橋南詰ニ而、五六十軒計流れ、追々水増候由、人馬夥敷水死御座候由、猶追々相知申候、

七月十日書狀

〔視聽草三集八〕庄内洪水

酒井左衛門尉領分、羽州庄内鶴岡城、當午七月三日夜^カ四日六日大雨洪水ニ付、田畠水押入、并破損所左之通

高三万七千七百拾貳石餘

伏見屋五兵衛